



第5回
忘れられない看護エピソード

[一般部門]

優秀賞

人の温かさに触れた時

〈埼玉県〉福山 恵美子 31歳

「ガシャーン」……。

私は高速道路で事故に遭遇したのである。まだ小学校4年生であった。お正月の三が日が過ぎ、父が運転する車で父母・親戚を含め7人で宮城の祖母の家からの帰路であった。まだ夜が明けぬうちのできごとだった。走行している車の後ろから4トントラックが追突してきたのである。追ってくるトラックに父は恐怖を覚えたという。車は原形をとどめず、お腹と背中がくついたりように潰され、私は運良くバックガラスが割れたおかげで外に放り出され、九死に一生を得た。両親も親戚も皆無事であった。ドラマのワンシーンのように救急車が一列に並んで赤いランプが光っていた。私はスト

レツチャーの上で気を失った。

目が覚めるとそこは病院の天井であった。私はその事故で右上腕骨頭を骨折していた。それからが壮絶な日々となった。

ストレツチャーに乗せられ病院の検査室に入ると、医師は私の折れた右肩をなんと麻酔もせずにグルグルと回し始めた。私はギャーギャー泣きわめき、その時の激痛は何にも例えようがないほどの地獄絵図であった。

そんな時、そばにいた看護師の方が「痛さと同じくらい私の手をちぎりなさい」と言った。これでもかというほど、その痛さに身を任せ、小学生であった私は左手で看護師の前腕を思いっきりちぎり引っかい

た。ふと看護師の顔を見ると、痛いであろうにひとつも嫌な顔も痛い顔も見せず、反対に私にほほ笑んでいた。そして「痛いね、痛いね」と共感し励ましてくれていた。

私はあの時、看護師の方の温かい優しさや芯の強さに触れ、人を思う看護の姿を垣間見させてもらうことができた。

「使命」……。自分の命を何に使うか。私もあの看護師の方のように苦しんでいる人のそばで自分の命を使っていきたい。それがきつと助けていただいた方々への恩返しになると思い、事故から20年の時を経て、現在、私はナースのたまごになった。いつか成長した姿を見てもらいたいと願いつつ。